人ひと　ワイド

災害医療活動「裏方」で支援

「AMDA」総務担当　ブルックス雅美さん(45)

岡山

ロシアの侵攻を受けるウクライナから避難する人々を支援する国際医療NGO「AMDA」（岡山市）の記者会見ではおなじみの進行係。マイクを握り、現地活動の状況をてきぱきと説明していく。だが広報係の顔は、多岐にわたる仕事のほんの一つだ。

「英語力を仕事で生かせればいいな」と漠然とした気持ちで、2016年4月にAMDAの面接を受けた。すると早々に熊本地震が発生。何が何だかわからないまま、ボランティアとしていきなり災害医療の後方支援を手伝った。

インターネットで派遣する医師や看護師などの宿泊場所を探す。各種の申請書類の作成に追われながら、「災害では平時が一変するのだ」と驚いた。

AMDAは「救える命があればどこまでも」を理念に掲げる。その活動は派遣者の身の安全の確保ができてこそ成り立つと痛感し、後方支援の重要性を思い知った。

海外や県外での活動の後方から支えてきたが、18年には西日本豪雨が岡山を襲った。AMDAの本部がある岡山自体が医療支援の対象となった。

約2カ月で総社市に延べ145人、倉敷市真備町に延べ170人を派遣できたが、物資の確保は困難を極めた。特に医師や看護師を乗せる車両の確保は難航。「大変なことになっている。絶対に何とかしなくては」と考え抜き、ボランティア登録をしている人の自家用車を、ドライバーごと借り上げる奇策で乗り切った。

AMDAはやがて発生すると言われている南海トラフ巨大地震も想定して、支援の準備を進めている。大きな被害が想定される四国各地にいかに迅速に到着し、医療活動を始めることができるのか。シミュレーションを繰り返す。

「人を支えるのは人。誰でも何かしら人のために出来ることはある」

被災地での医療活動を支える「裏方」として、覚悟と責任を胸に地道な取り組みを続けている。

（神崎卓征）